

発行／昭和63年12月15日 No.8
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

特な・か・ま集

行くぞ中年探偵団／吉 海 会
五十崎が好き／町づくりシンポの会
豊かに茂るふる里めざして／豊 友 会
手づくりの企画集団「奇祭屋」
炎にゆれて
囲炉裏端コミュニケーション『自在舎』
コラム 足助の炭の話

語録&GOROKU

REPORT

第3回まちづくり・むらおこし
交流研修ツアー
ビデオ紹介

海外レポート「モンドラゴン」part1
水の都フォーラム

愛媛ニューまちづくりテレビ会議

MESSAGE

マルセイユでサバイバルゲーム！
TOWNタウン パソコン通信

研究会議 News Letter

村おこし実践大学とは
えひめ地域づくり研究会議総会
全国〔木〕のフォーラム

まちづくりネットワーキングえひめ

舞 たうん

VOL 8



行くぞ中年探偵団

『吉海会』事務局 鴨井智峯

吉海町

事の起こりは四年前、同窓会の二次会の席でした。「子供何年生になつた」「それならうちと同級生やなあ」子供達が大人になる頃この大島はどうなつてゐるだらう。

などと飲んだら出てくる子供の話。

大島は、魚とみかんと大島石の島、老人の多い島、十年後には今治と橋でつながる島。古くは夏は塩田、冬は杜氏といわゆる出稼ぎの島でした。

子供達の為に何か一つでも遺してやれる物がないだらうか。その

夜は遅くまで話は尽きませんでした。ですから私達の村おこし会は「子供達の未来」というのが一つの前提だつたと思われます。

そして集まつたのが十七名、建

設業、石材業、漁業、ホテル業、学校教師、菓子屋、フェリー、塩業、公民館職員、茶御業そして私が坊さんで、皆職業はバラバラ。こんな人達が集まつて一つの事ができるだらうかななどと思つたのはとり越し苦労、ふだんは月二回の例会を持ち、会う度に職種のちがい立場のちがいと言うのは、違つた見方のできるもの。又相談する方も話しよいものです。

こんな事がありました。伯方島で塩業をされてる重松さんが自分の所の塩で何か作りたいと思案して例会でその話をしたところ、中

学校の教師であり郷土史の研究をされている藤田先生が「山に行けばつわぶきの芽が出る。昔、水軍がそれを植え食料に使つとった年寄から聞いた事がある。そこで芽をつみ水軍漬けとして出したところ、先日さつそく千袋の注文があつたと喜んでいました。でも問題はその芽の数が十分に採れない事です。他に特産であるわかれなんかもいいんじやないかと意見もあり、今は色々試作品作りに精を出しています。

漁業の喜田さんが「家に地引網に使える網がある、権利も持つてゐるしあれ使えんかなあ。」それなら今年の夏は地引網をしようと言つた事になり、夜な夜な集まり相談をかさねました。

地引網は他の町でもやっている所があるので他でしてない網にしようと言う事から、往復フェリー工所の佐高さんがドラム缶を縦に切り足をつけ網を乗せて作つてくれました。やはり餅は餅屋です。

この様にすべて会員の持ち寄り。何度も会をかさね最後は当日の天気。雨が降ればすべて無駄になりました。やはり餅は餅屋です。この様にすべて会員の持ち寄り。いか割り、ボートなどなど、一日パックですべて面倒みようと言う事になりました。なにしろ素人集団ですから、ポスターや切符作り



▲これぞ「島」のイベント!!



▼大盛況の観光地引き網



とれた!!

中には「こんなにサービスしてく
れで赤字じゃないの」と沢山の方
に喜んでいただき、おまけに拝ん
だ御かげがあつたのか、雲一つな
い日本晴れでした。もちろん予定
どおり黒字でしたが、会員の日当
は後の反省会で飲んでしまいまし
た。その夜は遅くまで盛り上がっ
た。

瀬戸内の温暖な気候のこの島を
訪れる人々のほとんどが、春の一
八〇年の歴史がある島四国遍路市
や夏の海水浴シーズンなどで、イ
ベントもフォトコンテストや地引
網や納涼船などこの時期に集中し
ます。そこで冬期の活動が問題に
なりました。

この島は昔、村上水軍が隆盛を
極め、現在でも昔を偲ぶ砦などの
史跡がいたる所に残っており、こ
の吉海の村おこしには水軍の歴史
は不可欠であり、忘れられている
歴史を掘り起こす為にも勉強会を開
こうと言う事になりました。町内の人達に水軍の歴史を知つても
らい、また、私達もこの勉強会で
何かヒントをつかもうと、みんな
一生懸命でした。

中には言うまでもありません。

今年は昨年のサービスが好評だつ
たのか、今治市内にポスターを三
枚ほど貼つただけで早くから団
体の予約が次々と入り、漁業の喜
田さんを始め、私達も海のおじさ
んになりました。

たのは言うまでもありません。

会員でもある藤田喜義先生にお
願いして、熱の入った勉強会を開
く事ができました。毎回沢山の人
達に先生の話を聞いて頂き、又話
が遠くの事でなく「あそこの家の
裏の石垣が昔の城砦じゃ」なんて
話になるから、皆自然と話の中に
吸込まれてゆくのです。

春も近くなり温かい日曜日に実
際に砦を見て回る事になり、会
員の親睦もかねて家族づれでお弁
当を持って行きました。

講師は郷土史の研究をされてい
て会員でもある藤田喜義先生にお
願いして、熱の入った勉強会を開
く事ができました。毎回沢山の人
達に先生の話を聞いて頂き、又話
が遠くの事でなく「あそこの家の
裏の石垣が昔の城砦じゃ」なんて
話になるから、皆自然と話の中に
吸込まれてゆくのです。

春も近くなり温かい日曜日に実
際に砦を見て回る事になり、会
員の親睦もかねて家族づれでお弁
当を持って行きました。

まだまだ私達の村おこしは暗中
模索と言った感じですが、この古
い歴史の中から新しい物が見出せ
る様、あの時こんな活動を始めて
てよかつたと言う日が来る様にお
もしろい事、探しに行って来ます。

会員の年齢層は二十八才から五
〇才で四〇才代が中心です。いつ
も何かおもしろい事ないかって探
偵団」と言うところでしょうか。

会の名前もやばつたい「吉海会」
から「中年探偵団」に変えた方が
夢があっていいなんて意見もあり
ました。



——一言でいえば——

五十崎が、好き

「五十崎の観光を考える会」
「町づくりシンポの会」 etc.

成田 幸子

五十崎町

「仲間」というと、まず「五十崎が好きな人々」と心の中に浮かびました。今、五十崎で私がかかる会は、「五十崎の観光を考える会」と「町づくりシンポの会」のことを少し書いてみます。

どちらも、参加した時だけ会員で、会長とか役員もいないし規約もありません。でも目的はつきりしています。アメニティ五十崎を創造することです。

昭和五十九年十一月に、合併三〇周年記念の町づくりシンポの会が開かれました。役場職員もお菓子屋さんも金物屋さんも、受付係とか会場のイス並べとか、自分のやれるところを受け持つてやりました。終わった後も熱気は続き、これだけで終わらせてはいけないと、毎月一回、町長も町職員も一

住民という立場で集まり話し合う場が出来ました。これが町づくりシンポの会です。毎月第三火曜日午後七時から十時まで様々な想いを出し合いました。出た内容を大きく分けて、自然景観保存委員会・視点を変えてみよう委員会・人材育成委員会・農村集落の活性化委員会・加工委員会・奥さん交流委員会・広く知りたい委員会と七つの委員会が名付けられたのです。

誰でもどこでも、いつからでも、いくつでも入れます。入れると言うより自分のおりたいところに口や手を出すと「言うことです」。

その当時、集まれば出る話はやはり川の話が多く、翌年（六〇年）七月には、第一回目の川の研修として、山口県の錦川、一の坂川を見に行きました。全町



入会すると全てに協力しないといけないと言うようなヤボな事はありません。したい時だけ顔を出します。○をやって欲しいというような第3者のお願いは通らず、まず自分は○○をするけれど一緒にしませんか、という呼びかけから始まります。

音楽の夕べは今年で四回目を迎えます。生のクラシックが聴きたいなあと言う一人の声に乗せられた何人かが走りまわります。演奏家との交渉得意とする人、ボスチャーチケットをつくる人、会場づくりをする人、手伝うふりして壁にもたれてタバコを吸う人も含め、その時の仲間です。会場使用料、ピアノ輸送費、調律費、演奏者謝礼、チケット印刷費と概算を立てるときつたら済むなあ、お客様は四人の家族ではや十二人は来るぞ。ということになる訳です。そんな外から見るとあやしげな会があり、具体的には小田川の原っぱで遊ぶ「日曜市」や生の演奏を聞く「音楽の夕べ」を催したりしています。じゃコーヒー入れる係をお願いしようかと言う具

合いで。すると町の方も、会場費は取らないことにします、なんて言ってくれたりして、有難く申し出を受けることになるのです。

一九八八年一〇月の「スイスと五十崎・川の交流」（シンポの会主催）でも、湯茶接待係をかつててくれたおばさん達は、おいしこれだけではなく香まで焚いてお迎えしたということを後で聞いて、大変驚きました。お昼のお弁当を引受けてくれた食堂では、この日のために銀杏や菊の葉を取りに行ったり、和紙の包みを考えたりしてくれました。五十崎はすごいなあと私自身思う訳です。講演会に全国から集まつて頂き、様々な方々と交流が持てることもすばらしいことでも大成功だったと思いますが、こんな素適な五十崎の人々と出逢えたことは本当にすばらしいと感じます。

私はこの講演会では、チラシ作成と当日展示了「とよあき橋デザイン全応募作品」と「スイス研修写真」の準備及び展示を受け



持つたのですが、どうしても方法ばかり先考してしまいます。どこに何をどんな風に展示させるか。

それを実現させるためには、自分一人徹夜してもやってみせるタイプなんです。でも、よもだ熱長（考える会、シンポの会の世話人）はいつもこう言われます。「いかに多くの人々の手をわざらわせるか、かかわりをもつてもらうかだ。たとえその為展示半ばで時間になつてもいい。出来たところまでいい、きれいに展示することが目的では無いのだから。他の人々をいかに引っ張り込むか、その人を元気にさせることが目的なのだから……」と。

ここで私はいつもなつてしまいますが、私はこうするのはキラ

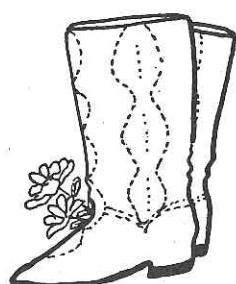
イとか、結果や周囲の目から見られる自分というモノはどうしても囚われてしまうからです。塾長は、シカル後無門ノ関ヨリ入ラン、とよく口にされます。人類の歴史は自由獲得のための歴史であり、最後には己自身からの開放にまで行き着くと言われます。

とてもそこまで突き詰めて考えることは難しく、私流の解釈かもしれないが、今までのいくつもの体験を振り返ると、確かに人々は他人から言われて行動している間はその時だけで終わってしまうようです。何の為にやるのか目的がはっきりしていて、そのためになどえその為展示半ばで時間になつてもいい。出来たところまでいい、きれいに展示することが目的では無いのだから。他の人々をいかに引っ張り込むか、その人を元気にさせることが目的なのだから

う瞬間を日常生活の中でより多く味わえるシカケとして存在しているかもしれません。

先日の「スイスを五十崎・川の交流を終えて、ゲルディさんを囲んでの懇親会の席のことです。出席者一人一人による九〇秒挨拶の時、今までも何かと参加協力してくれていた男性が、「今まで私はだ塾生と言われるときを横に振つていたけれど、今日からはYESと言います。」と挨拶されたのを聞いて、わかったことがあります。考える会やシンポの会に流れれるよもだ学の塾生かそうでないかは、自らが決める。当たり前なことですが、そういうことなんだろ

うと考えると、己の個人的感情はまず置いて、一つの役割として自分はどう動けば良いかを問うことになります。そして、自ら「やるう」と思つた時、自由を味わった瞬間であり、塾長の言う「自由人いくさびと」となり、次の瞬間から新たな制約に縛られる訳です。考える会やシンポの会は、そういう自由を味わ



豊かに茂るふる里めざして

「豊友会」 大本 昭裕

長浜町

な・か・ま

豊友会は、山村の過疎に悩む人口約八百人、世帯数三百三十戸の喜多郡長浜町豊茂地区で、自分たちの住んでいる地域を守ろうと、一生懸命生活している青年団を卒業した成年が集まり、地域の将来を考えようとした昭和四十二年七月に発足したグループである。

この豊茂地区は、国立公園に指定されている霊峰金山出石寺（八百二十メートル）のふもとに散在する農林業を中心とした小さな地域であるが、先ず豊友会の発足したいきさつについて述べてみたい。

ある。

各地区に青年団という組織はあるが、青年団を卒業すると集う機会がなくなり、地域の人間関係もとだえがちで、同じ地域に住みながら、お互いに何を考え、どんな生活をしているのかも知ることが

それは各々の家庭がよくなることだ。」という意味がでてきたのである。そこで、職場の先輩でもある今は亡き山本辰雄さんらが中心となつて、「みんなが集つて意見の出し合える場を作ろう。そして、みんなが助け合いながら地域のことを考えてみよう」と十五人の仲間に呼び掛けてスタートしたのである。

この豊友会といふ名称もみんなが持ちよって、豊茂地区の「豊」をとり、豊かな友の会、「豊友会」と命名した。

また、発会式では、「人間関係を深めることにより、横のつながり

この豊友会は十五人でスタートしたものが、現在では五十人を越える大世帯となり、昭和六十三年二月には発足二十周年を迎えて記念大会を開催した。

会員の組織構成は、二十代の後

この豊友会は十五人でスタートしたものが、現在では五十人を越える大世帯となり、昭和六十三年二月には発足二十周年を迎えて記念大会を開催した。

この豊友会は十五人でスタートしたものが、現在では五十人を越える大世帯となり、昭和六十三年二月には発足二十周年を迎えて記念大会を開催した。

この豊友会は十五人でスタートしたものが、現在では五十人を越える大世帯となり、昭和六十三年二月には発足二十周年を迎えて記念大会を開催した。



▲発足20周年記念式典での大本さん

半から五十年代半ばと年齢層も幅広く、職業も、農業、公務員、農協職員、会社員等と多種多様に分かれおり、基本方針に沿って、毎月一回くらい集つて話し合いの場を持つように進めてきた。集まれば自然と農業問題、職場の問題等それぞれが持つ悩みや意見が出され、お互いかその問題について真剣に考え、コミュニケーションを深めてきた。

毎年総会時において、年間事業計画を定めて取り組んでいるが、主な活動としては、農協前の公衆電話の設置の呼び掛け、バス停留所への奉仕傘の設置、町議会、県議会などの傍聴、地域づくりにおける先進地視察、学識経験者を招いての研修会、青年団・婦人会等との話し合い、公共施設の清掃奉仕、成人学級の開催等、また、地域の実状を把握し、問題点を深るために、アンケート調査などを実施して、自分たちの住んでいる地域を少しでも活性化していくことで、いろいろな事業に取り組んでいる。

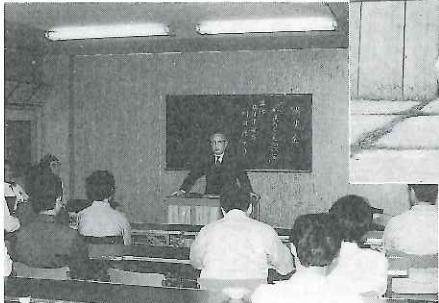
昨年は、公民館が中心となり、各種団体が協力して、第一回豊茂ふるさとまつりを開催した。その中で、豊友会はヒターン青年が飼育している「いのしし」の肉の即売やバーベキューのコーナーを担当して、まつりを盛り上げることができた。このふるさとまつりを契機に、過疎化の波を少しでも止め、地域の活性化を図っていきたいものである。これからイベントは、参加して何かを体験できるものでなければ成功しないであろうし、豊茂ならではの独自性をだしていかなければならないであろう。

このような状況の中で、この豊友会も五十人を越える大世帯となり、職業の違い、年齢の差のへたり、発足した当初からみると会員の年齢も若返っており、この年齢の差を越えて話し合い、いかに活動を展開していくかということが、これから課題となっている。

豊友会の基本目標は、「地域発展のため積極的に取り組む。会員相互の親睦を深め、助け合いながら、

ら地域の和を広げ、心のふれ合う豊茂づくりを進める。研修を深め文化的で心も体も豊かな地域づくりをめざす」ことであり、二十一世紀に向って望ましい地域づくりを進めていくためには、次のような課題に取り組んでいく必要がある。

▼講師を招いての研修会



先進地での視察研修

先ず、会員の年齢差、職業の違いなどがあり、会の運営の中心をどうしていくかという難しい面もあるが、豊茂という地域でこれらも生活していくという共通点にたって討議を進めていくことである。そして、社会が複雑多様化しつづけると、地域の人々の連帯感が薄らぎがちなので、豊友会がこの中心となつて活動を展開していかねばならない。また、激動する社会の変化に対応できる活動を進めるためには、いろいろな研修を通して、豊友会のために、地域のために、家庭のために何をするか、何ができるのかを考え、量から質へと方向を転換していかなければならない。そして、進行している過疎をなげくことをやめ、過疎のマイナス要因をプラスに切り返して、ふるさと豊茂の産業を振興していかなければならない。

全国各地で、町づくり、村おこしが盛んに展開されているが、究極的には、どの地域でも自分たちの住んでいる所が、活性化して快適な生活がおくれる環境づくりに努めていきたい。

豊友会である。

成人となつた豊友会であるが、全国各地の仲間と情報を交換しながら、楽しく明るい地域づくりに努めていきたい。



▲つり大会

な・か・ま

手づくりの企画集団

KISAI-YA
『奇祭屋』 楠原由美

宇和島市

企画集団『奇祭屋』誕生!

—山あり谷ありの二年間—

一九八六年、二月、木枯らしの吹く寒い夜、三十才のある主婦のところに何人か集まってきた。そして、それぞれの思いの中で、奇祭屋という企画集団が生まれた。

初めてのイベントは映画と講演。何もかも初めての経験で苦労したが、その分、感動も大きかった。このイベントが終わった後、気が付くと女性だけになっていた。今でこそ女性集団だと言っているが、(奇祭屋はこれが完りものになつてゐる)はじめから、そうだったのではなく、自然にそうなつてしまつたのだ。決して、女だけにこだわっているのではない。

二度目のイベントを組むときの企画メンバーは四人だつた。企画会議は週一回、木曜日の八時から

夜中の一時を過ぎることもあり、そんな日の翌日の仕事はきつかった。それでも、私はこのメンバー達と会つて話をするのが、とても楽しかつた。私の知らないことをよく知つていたし、第一、年に關係なく話をすることができた。みんな同じ仲間なのだ。

企画から、準備に入ると忙しくなってきた。全くのボランティアなので、なるべくお金をかけないためにも手作りであるしかなかつた。自分たちの持つている力以上のものを出しても間に合わず、学生や主婦にも応援を頼んだ。もちろんボランティアで。このイベントは、こうした人たちの協力の上成り立つていて。しかし、この

「お互いの信頼関係がなくては、この山は越せない!」と、判断した團長は、企画以外の



▲明るいヨ…これぞ「奇祭屋」

話し合いをすることで、私たちに「自立」を求めてきた。結成当初から、そのような話はしてきたりの刺激になつていていたのだが、時として、考へてもいなかつたような話は難しい宿題と同じで頭がパンクしてしまうことがある。そのようなことがきつかけで、一人の人がやめたいと言つてきた。「このイベントが終わつたら」と、言つたのだが、

「そんな気持ちでやるんなら、やらん方がいい!」

と、私は思わず言つてしまつた。一生懸命お手伝いをして下さつて、メンバーフォー人が本当に一つになつてゐた訳ではなかつたのだ。

奇祭屋解散? という危機に直面しながら、私はそれを考へなかつた。かえつて意欲が湧いてくるのだ。どうしても「逃げたくないかった」からだ。私は、いつも自分の心を大切にしてきた。たしかに、頭がパンクしそうになつたこともあつたし、ケンカをしたこともある。バラバラになつてしまつたけ

あとで「しまつた」と思つたがもう遅い。ただでさえ人数不足なのに抜けてしまつたので、とつてもたいへんだったが、このイベントは、大成功だつた。

二回ものイベントをこなしたにもかかわらず、團長を除く私たち二人は、あまり実感がなく、自信というものがついてなかつた。その原因は、團長に頼りすぎていたことにあつた。それなら、と團長はあつさり引退し、私が二代目の團長を任せてしまつた。いきなりのプレッシャー。その時のメンバーは三人だつたが、気持ちばかりあれり、なかなか思うようにいかず、結局、メンバーは私だけになつてしまつた。ここで奇祭屋は集団ではなくなつてしまつたのである。

KISAIYA 奇祭屋とは？

かわった奇 イベントをする集団です

- 自分たちの街に青春する場を自分たちの手でつくりだし活気のある街にしよう！

「きさいや」は宇和島弁で「いらっしゃい」の意味です

- 誰にでも気軽に「きさいや」といえるようなイベントをしよう！
- 「みんな集まれ！」

「きさいや」は方言です

- 何らかの形で地元とかかわり、地元の見直しや活性化につとめよう！

活動記録

’86.2.1	結成
3.30	奇祭屋FESTIVAL Part1 「ZERO Group社長 講演」 & 映画「カサブランカ」
12.13	奇祭屋FESTIVAL Part2 「元気ランド・よかつたさがし'86」
14	図書館まつり <奇祭屋一周年記念特別企画>
’87.3.29	「春だ、まつり、図書館だ」 (本108冊寄付)
’88.4.14	New奇祭屋
5.15	奇祭屋新聞「何？南予宅配便」 No.1発行

れど、この二年間で、私は随分いろいろなことを学んだ、それを無駄にはしたくなかった。

他にやめなかつた理由のひとつは、「イベントが好き」だから。

何もないままさらなところに、みんなが一つになって何かをつくりあげるって、とても素晴らしいことだと思う。これ以上の感動があるだろうか。本当の町づくりっていうのは難しい理論ではなく、人の心なんだと思う。

そして、もうひとつは、仲間がほしかったから。口下手で人づきあいが下手な分、本当に信頼できる仲間をいつも求めていたんだと

思う。

奇祭屋新聞「何？南予宅配便」

—新しく生まれかわった奇祭屋—



▲たまには…青空の下で

はじめっから、奇祭屋をすることにした。二年前と比べれば、イベントの収益金が少し残ってるし、多少のネームバリューもできている。まず、はじめに思ったのが、「宇和島のことをもっと知りたい」と、いうことだった。いろんなところを見てまわり、自分たちが感じたことを、そのままの言葉で表現し、それを読んだ人にも何かをかんじてもらえればいいなあと思った。さっそく、高校時代の友人に話をもちかけ、今までの奇祭屋へのプレッシャーをかんじないためにも、一からはじめることになつた。

期限は一年間、月一回発行。いろんな人にみてもらいたいので、原則として無料とした。しかし、ボランティアで資金も少ないので「よかつたら年会費（千円）をいただく」ということにしている。

奇祭屋は、結成した時から今まで、ずっと赤字になつたら解散ということにしてきた。赤字になるということは、やっても無駄だということと同じなのだ。今のところ、心配はない。

この新聞の主題は、南予（主に

宇和島）を散策しながら、その良さを発見していく。というところで、テーマは、その時の自分たちの感性で「おもしろい」と思った多めのテーマでもできるだけに決めている。教科書でも、観光ブックでもない、本当に身近なこととして受けとめてもらうたと、いうことだつた。いろんなところを見てまわり、自分たちが感じたことを、そのままの言葉で表現し、それを見た人に何かをかんじてもらえればいいなあと思った。さっそく、高校時代の友人に話をもちかけ、今までの奇祭屋へのプレッシャーをかんじないためにも、一からはじめるうことになつた。

企画したことと、いろんな人とふれあい、同じ何かをかんじることができる。この新聞づくりも、大勢の方々の協力の上で成り立つているのだ。

奇祭屋は、自由な集団で、この一年が終われば、また新しい奇祭屋が生まれるだろう。何でもいい、行動するということが一番大切なんだと思う。

炎にゆれて

囲炉裏端コミニケーション

『自在舎』 山 中 保

野村町

◆山中 保さん



▽足助屋敷からの 生活提案△ 「THE SUM」

「忘れ去られようとしている炭、炭を知らない世代、昭和三〇年代までは炭がなくては生活できなかつた事實。

炭、それにまつわる人間の生産と文化の歴史。炭の不思議、炭の可能性、炭の明日を、山の文化についてを語りたい。

衣・食・住・生活のすべてに、

この「囲炉裏端ミニケーション」は、なかなかのものですよ。初めは不安だったけれど、日がたつにつれて、利用の申し込みが

予想を上回る勢いで増え続け、遠

くは東京・神奈川をはじめとして、山口県や大分県といったところからも来ていただこととなりました。

そして、メンバーをはじめ地域

の人々の関心も少しづつ高まって、

今ではいろんな面で協力していただいております。

これは、イベントと呼ぶにはあ

まりにも土の匂いと人の匂いのする「まつり」であったと思う。

足助屋敷は、単なる民具展示の器ではない。ここに集う人々の生活の場となっている。だから、屋

な・か・ま

私たちのグループ『自在舎』は、地区の活性化の一助になればとの意欲に燃えて、昨年の五月に発足しました。

会員は七人。自動車整備士、建設業など、職業はさまざまです。会の名称は、囲炉裏の上で鍋などを吊す『自在かざ』からつけました。

地区内には、現在かやぶきの家が二〇数戸あり、その半数が無住です。その廃屋に目を向けて一戸を無償で借り受け、古風さを壊さない様に心掛け、仕事を終えた夜間に改装に取り組み、『自在舎』と名付けました。

最近、本物——などという言葉をよく耳にします。私たち『自在舎』は、かやぶき屋根に囲炉裏ということになりました。

何故かというと、田舎にマッチしていることはもちろん、温かさ

があり、心にゆとりとやすらぎを与えてくれそうだったからです。こういった家を、交流の場とか一家の団らんなどに自由自在に利用してもらつたら、どんなにか喜んでもらえるのではないかと思いつきました。

『自在舎』のある所は、東宇和郡野村町の、中心部から二〇キロメートルも離れた高知県境に近い静かな山村です。

過疎化の進むこの村には、あちこちに廃屋が目立ち始めております。私たちが改修している『自在舎』もその中の一つで、百年余りも昔の家だそうです。

オーブンして一年を過ぎました

が、学生とか家族、また、いろいろな愛好家などのグループなどに

利用していただいております。

ここを拠点として、キャンプを

この「囲炉裏端ミニケーション」は、なかなかのものですよ。初めは不安だったけれど、日がたつにつれて、利用の申し込みが予想を上回る勢いで増え続け、遠くは東京・神奈川をはじめとして、山口県や大分県といったところからも来ていただこととなりました。

そして、メンバーをはじめ地域の人々の関心も少しづつ高まって、今ではいろんな面で協力していただいております。

これは、イベントと呼ぶにはあまりにも土の匂いと人の匂いのする「まつり」であったと思う。

足助屋敷は、単なる民具展示の器ではない。ここに集う人々の生活の場となっている。だから、屋



▲シルク大鼓もかけつけて！

いものです。

『自在舎』のオリジナルTシャツのデザインは、東京からお見えになったイラストレーターのお力を借り、プリントの面でも松山の衣料店のお世話になっています。このような人々と巡り会えたのも、メンバーの「やるぞ！」という熱意によるものかも知れません。

また、訪れた学生の中には、地域の歴史・民俗等の調査で、老人クラブの人達と交流して顔なじみとなり、その後も連絡し合ったり、便りのやりとりもあるようです。

この様に、『自在舎』が地域の住民と外部の人々との交流のパイ

役になっていることは、誇りであります。大変嬉しく思っています。

最近、「村おこし」とか「町づくり」ということがよく言われていますが、よく考えてみるとこの『自在舎』は、個々人それぞれの目覚めから始まっているようです。これは、自らをしばるものでも、人に押しつけるものでも無いと思うのです。

メンバーの数もこれまで増えもせず減りもせずにやってきた訳だけれど、それはそれで良いと思ってます。一緒にやってきて良かったという顔が、訪れた人々との交流の時などに多く見受けられ、これが『自在舎』の最大の利益だと感じます。

（前略）
自在舎、ここには私の田舎にはもう残り少ない田舎がふんだんにあります。かやぶきの家いろり、自在かぎ、おくどさん、五衛門風呂などなど……。
子供時代の記憶に残る田舎家をここでみつけ、心安まる心地がします。

夕方釣った美しい渓流の女王、アメノ魚の姿を思い出し、いろいろですが、氣負わずにやつていきたいく思うのです。そして、「来て良かった」「また来てみよう」と感じていただけの『自在舎』を訪れる人々と一緒にになって創つてみたいと考えます。

その人生のハレの日をシンボジウム・創作オブジェ炎の祭典・炭琴の音楽祭・炭焼料理パーティーと現代風に、そして尚且つ足助屋敷風にアレンジしたのが、今回の「炭焼祭り」であった。



まだほんの一年生で、土台づくりに専念しなければならないところですが、気負わずにやつていきたいく思うのです。そして、「来て良かった」「また来てみよう」と感じていただけの『自在舎』を訪れる人々と一緒にになって創つてみたいと考えます。

土の匂いのする「まつり」に出会い、今流行のイベントを考えさせられた。誰のための祭りなのか、祭りとは本来どういう日だったのかを、また、忘れていた炭の大切さを感じた「足助屋敷からの生活提案」であった。

（研究員・近藤）



この様に、『自在舎』が地域の

住民と外部の人々との交流のパイ

敷で行われている数々の手作業では、人の肌の温もりを感じるのである。

* * 語録 & GOROKU *

田頃自分が考へてゐる事や、漠然と意識の底で“感じて”いることを整理し、しかもそれを“言葉”として人に伝えることは意外と難しい。ましてや、己の何を為さんとするかさえ定かでないときはなおさらである。それだけに含蓄のある言葉に出会うと、一瞬、胸の晴れる思いがすることがある。

過日、湯布院にお住まいの中谷健太郎氏が大分県の『豊の国づくり塾』に寄せられた一文に触れ、そう感じました。その抜粋を僭越ですが紹介させていただきます。

『できる』ことを精いっぱい 充分にやる』

四国の友人がやってきたので仲間が集まつたとき、彼は『地べたからの立ち上がり』ということを言いました。土の上にものをつくることからしか町づくりは始まらないと。まず身近なところから自分の力で始めるべきだ

と。
また東京から大分に移り住んでまもない友人の一人は言いました。『かいわいをつくることが大事ではないか』と。建物とか、企業とかを個体で考へるのでなく、出遇い、集落、

かいわいを大事に考へるべきではないかと。

村生えぬきの、六十五歳の先達は言いまし
た。

『まず自分たちが美味しいものを作つて食
ぶることから始めにやなあ、それから都会の
人に買うて貰うちゅう順番じやろう』

豊の国づくり塾と言ひ、あるいはムラ起こ
しと言つても、特別のことをやるわけでもなく、
『できる』ことを精いっぱい、充分にやる』こ
とでありましょう。頭の中で考え、あるいは
人から聞いた夢物語を、卓越した手練手管で
実現してゆく話ではありますまい。

地域には地域の風土があります。そこに人

が住み、風土と拘りながら生きています。風
土と人の拘りをしっかりと培い、構築するこ
とが『生きる』ことの中味であり、それが
『ムラ起こし』の元でありますよう。

いろいろの形態の経済組織や企業を、暮
りの容の中にきちんと埋め込むことが肝心であ
ります。そして暮しが豊かに膨らんでゆくこ
と。暮しをはみ出るような産業構造を造りあ
げるべきでは決してありますまい。

その辺りの話が豊の国づくり塾の中核テー
マと私は思います。『それぞれに咲いて美し
い』豊の国であって欲しいのであります。

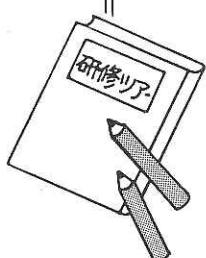
△豊の国づくり塾資料より／中谷健太郎氏



『生きている』人たちとの“出会い”

(財)愛媛県まちづくり総合センター

井 上 謙二



▼旅立ち……▲

秋晴れの十月二十七日、私達の一行は宮崎行きの飛行機の中にいた。今回で三回目となる『交流研修ツアーハ』は、県内の八市町村から参加した十五名に、私たちセンターの三名を加えた十八名の武者修業の旅となつた。

事前研修会を“急入り”に済ませていたためか、旧知の友のようになごやかな雰囲気での出発だつた。

▼照葉樹林都市・綾▲

宮崎空港からレンタカー一台に分乗し、午後一時過ぎに綾町に着く。町のいたるところに手入れのゆき届いた“花”が咲いている。まずは「目に見えるものから」

ということ、照葉樹林帯の『世界の吊り橋』・『照葉樹林文化館』へ。いきなりの碧緑の世界に思わず深呼吸する。その足で『土からの文化を楽しむ農園』(貸し農園)や『馬事公苑』(乗馬クラブ・競馬場など)を見学。この頃になると、同行していただいた役場産業振興課の吉川主事にも質問が相次ぐようになった。

その後、歴史資料館として地元の材・地元の職人によって建てられた『綾城』、綾の手づくり工芸の展示・販売施設である『国際クラフト之城』、手づくりの焼き物・織物を体験できる『工芸実習館』を訪れた。

この工芸実習館で私は、『ひむか邑』の一員でもある玄太染織工

房の日高さんにお会いした。彼は私に会うなり、「観光的な研修ならいくらやつても意味が無いでしょう。(『舞たうん』で知った限りだが)五十嵐の亀岡さんあたりに何故学ばれないのですか。つまり、意図的にまちづくりができると考えると間違いですよ。自分自身が変わらない限り、自分が日々の

“暮らし”を本当に楽しみながら、「生き方」や「人」を大切にしない限り、“まち”は変わりませんよ」と鋭い指摘。後からやって来たツアーのメンバーが、思わずたじろいだ一瞬でもあった。

三階の研修会場で、猪野参事、特色あるふるさとづくり対策室の福留室長、岡元教育課長から綾町のまちづくりについて学ぶこととなり、「町長室」があるのにも驚かされる。

のカルチャーやショックのせいか皆神妙な面もちである。しかしそれも束の間、部屋に戻っての二次会では、それぞれが当面している問題や日頃抱えている疑問などが次々と出され、一大バズ・セッションの場となつた。「伯方の塩」の話から始まって、まちづくりやイベント論まで、本音の部分での議論が深夜まで続いたのである。

▼綾町での長い一日▲

二十八日の午前九時、新たなる気持ちで綾町役場を訪れる。入り口のフロアには工芸作品などの特産品がところ狭しと並べてある。そのうえ、窓口が一ヶ所あるのみで事務所内には入れない仕組みになっている。従つて「〇〇課」の表示も無い。ホールの横にはいきなり「町長室」があるのにも驚かされる。

見せていただいたあと、「照葉樹林都市・綾」というコンセプトの元での『自然生態系のまち』『本物のまちづくり』等について説明をうける。

このような大きな基本理念を追及していく行政の取り組みの一方では、予算の説明等のために住民との会合を連夜にわたって開くなど、徹底した住民との対話の姿勢も見られるのである。

綾町のまちづくりのもう一つの柱ともいえる『自治公民館制度』について、さらには社会教育のなかでの『花いっぱい運動』・『手づくり文化祭』などから、人づくりと地域の自治意識こそ綾のまちづくりの基本であることも、改めて認識させられた。

また、産業・商工・観光といった全般的な説明のあと、あくまでも本物づくりをめざす有機農業の取り組みや、行政改革についても学ぶことができたのだが、それぞれの取り組みが基本理念でつながつており、しかも徹底して成されていることに感銘を受けたのである。

午後には商工会の平木場指導員の案内により手づくり工芸を訪問。東京出身の大原さんの所では、素朴な焼物もさることながら、手づくりともいえる木造のりっぱなアトリエに目を見張る。綾の手紡染織工房では、糸紡ぎから機織り、藍染めの現場まで見せていただき。見事な織物や染物が「人の手」によってつくられるということを、私は忘れていたのではないだろうか。

西武で木工家具を作つておられた山下さん、『ひむか邑』のリーダーでもある綾川陶苑の川村さん、県庁マンから染織工房を始められた四本さん。それぞれに自分たちの「生き方」を大切にしておられる人々との出会いは感動としか言えないだろう。

経済的に苦しかった時代を越えられた今となつても、「家族とともに自分の作りたいものを大切に作っていく」という『基本の暮らし』を守り続け、必要以上の「モノ」を求めない生き方は、我々の味の体で鹿児島へ向かう。雄大な高千穂の峰を右手にながめながら、南へ……南へ……

そのことを誰もあえて口にはされなかつた。

その夜は、大原さん、四本さん、平木場さん、それに前日お会いした日高さんと木工の児玉さんを加えた方々と、生き方・在り方・地域などについて心を開いて交流させていただくことができた。

えた方々と、生き方・在り方・地域などについて心を開いて交流させた。その後、農村の表土の再生、そして表土の革命へ」(表土—農村社会の持つ、人が「生きる」ためのあらゆる要素)という壮大なる目標と、そのための明快なる理論展開。そして、その情報能力とそこに動いている人々……。体感をもつてしか味わえない迫力が感じられる。



▲ひむか邑の皆さんと

▼鹿児島の 熱きママたち▲

南の大地に沈む赤い夕日を受けながら、内之浦へ向かう。私を含めて、ほとんどが放心状態に似て言葉も少なめである。

加藤さんの故郷でもある内之浦町は、青き山々と海に囲まれた静かな町であった。

鹿屋市の南方圏交流センターで代表の加藤憲一氏にお会いした瞬間から、我々のゆるみかけた頭脳は極度の緊張と、異次元の世界に引きこまれてしまつた。

まさに「リーダー」ともいえる加藤さんの、「農村の表土の再生、そして表土の革命へ」(表土—農村社会の持つ、人が「生きる」ためのあらゆる要素)という壮大なる目標と、そのための明快なる理論展開。そして、その情報能力とそこに動いている人々……。体感をもつてしか味わえない迫力が感じられる。

交流は意見(思想)のぶつかりあいだと言われる加藤さんの前に、しばし圧倒されていた研修生からも質問が始め、またたく間に三時間の時間が過ぎてゆく。

長井さんをはじめ、自立する農民の意識集団である『農援隊』のリーダーの方々や、地元のバイオニア・クラブ等の皆さんとの交流会議が、焼酎片手に始まった。農村の自立をめざす皆さんの真剣な

夕食もそこそこに、交流会場となっている長井さんのお宅に行く。街灯も無い畠のまん中に、カラモジア大学でタイに行かれた長井さんが建てられたタイの高床式の家があった。二階に上がってみると電気が無くて、ランプが一個ともつてないだけである。東南アジアでの暮らしをつけられたような、強烈な印象を受けた。



▲高床式施設でのマグマシンポ

議論に、私は少々気後れさえ感じるものを感じてもいた。カラモジア一期生で鹿児島に来られているタイのスリヤ・サエチャンさんは、「モノ・カネ」だけの社会にどこかでブレーキが必要なことを教えていただいた。

▼旅のおわりに……

さて……今回のツアーやが目的でなく手段とするならば、これからが本番ではないだろうか。この旅で得た『感動』と『自ら実践する』こと、あるいは幅広く『生き方』を見つめる心は、たとえ明日に芽がでなくとも、何年かのちに必ず、それぞれの地域で生きてくることだろう。そして、そのために今回ツアーやでのネットワークをフルに、しかも長く活用していきたいものである。



■インフォメーション

地域づくりビデオ 貸出しの「」案内

(財)愛媛県まちづくり総合センターでは、次の「地域づくりビデオ」を用意して、無料でお貸ししております。ぜひご利用下さい。

◆第二回まちづくりテレビ会議

* 東京の地域総合研究所(CCS K)の森戸哲所長・植松勇氏・

福田敬氏と、愛媛の守谷和久・

白石高啓・鎌田宏史の三氏が、『遊』をキーワードに『遊核』のまちづくり等についてテレビ対談しています。

「まちづくり総合センター制作」
△一〇〇分▽

◆第一回モウーモウー塾

* 二十一世紀えひめニューフロンティア・アグリープ主催。小中学生を

中心とする大野ヶ原での三泊四日の体験学習と感動の模様を伝える。
△一〇〇分▽

◆第三回田舎を飲み喰い語るうまい人

* 広島県の『グループ新友』が主催した、都市で田舎を満喫する、人とモノの交流イベント。
△三〇分▽

◆木の新時代を求めて

* 久万町での試みを中心に、林業の問題点や今後を探る。
△三〇分▽

◆既存のビデオもあります

* 利賀は、今・利賀のそば祭り「富山県利賀村」△六〇分▽

* サヨナラ後楽園球場スノーフェスティバル「新潟県安塚町」△六〇分・三〇分▽

◆氷点下からのチャレンジ

* 山形県朝日村・新潟県安塚町・北海道陸別町・士別市など△三〇分▽

◆教育と交流の村・田野畠からのメッセージ

* 岩手県田野畠村△三〇分▽

◆西瀬戸むらおこしテレビ会議

* 大分の中谷健太郎・矢幡欣治・溝口栄治の三氏と、愛媛の亀岡徹・岡田文淑・若松進一の三氏の対談△一〇〇分▽

◆成川溪流上り駅伝大会

* 広見を元気にする若者会△六〇分▽

◆第二回トライアスロン中島大会

* 温泉郡中島町△六〇分▽

◆お申し込み先

(財)愛媛県まちづくり総合センター
△八九九(二五)五五五七

モンドラゴンを訪ねて

— モンドラゴン協同組合とは —

(財)愛媛県まちづくり総合センター

近藤

誠

○ はじめに

スペインのモンドラゴンを訪れてから、早

五ヶ月を過ぎようとしているが、今だに私の頭のなかでは整理がつかない。

私達のなかでは、麻痺しかかっていた「あたり前のこと」を聞いたような気がするし、いやそうではなく、「協同組合地域社会づくり」という新しいまちづくりの指向性を学んだような気もある。

三日間という研修期間は、あまりにも短く、通訳がいるとは言え、言葉の不自由さを感じざるを得なかった（ただし、通訳の方には大変お世話になつたので、誤解しないようにしてもらいたい）。

○ モンドラゴンとは

モンドラゴン協同組合という言い方をするが、実際にそういう名前の協同組合があるわけではない。

スペインの北部、バスク諸州の一つでギプスコア州の小さな町「モンドラゴン」が発祥地であるがためにこう呼ばれているのであり、

ある共通理念に基づく協同組合の集合体の総称とも考えて頂ければよい。

今年の七月四日に、モンドラゴンを訪れた時の第一印象は、「なんだ日本の農山村の風景と同じじゃないか」というものだった。平坦な農耕地というものは極めて少なく、急峻な山の斜面には、松などの造林地と放牧地が点在しているといった感じである。

ただし、スペイン語を聞いた途端にやはりここは外国だと実感したのも事実ではあるのだが……。

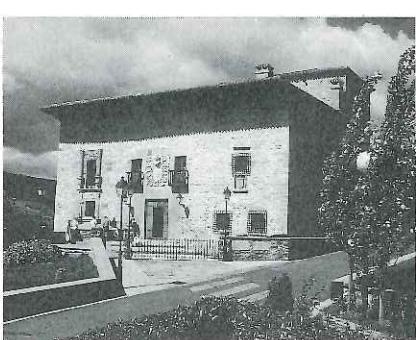
また、私達が研修を受けた研修所「イカスピデ」は、ヨーロッパらしい歴史の重みを感じる建物であった。

○ モンドラゴン協同組合

- ・ 一次組合と二次組合

モンドラゴンの協同組合は、大きく分けて二つに別れる。日本で言う単協のような一次組合と単協のための支援協同組合とでもいうような二次組合である。

一次組合は、工業・農業・消費・サービス・住宅などがある。その数は、別表のようになっており、モンドラゴンは、工業生産協同組合が半数をしめている。



イカスピデ

モンドラゴン協同組合の一次組合

	組合数
工業生産協同組合	85
農業生産協同組合	8
消費協同組合	1
教育協同組合	45
住宅協同組合	17
サービス協同組合	4

次に二次組合であるが、これには、CLP（労働人民金庫）、イケルラン（技術開発センター）、ラゲン・アロ（社会保障機関）、教育文化連盟がある。これらはそれぞれ、金融、研究開発、保険、教育の専門機能を分担する広域協同組合であるばかりでなく、種類の違った一次組合を計画的に結び付ける役割を果たしている。

それでは、ファゴール、エロスキード、CLPの三つについて具体的に見ることにする。

- ・ ファゴール

ファゴールは、電気洗濯機とガス調理台を製造している工場であり、この製品は、EC諸国にも輸出され、バスク地方での外貨の稼ぎ頭になっている。

ファゴールは、ギプスコア州にある十二の

地域性の強い工業生産協同組合が、自然発生的にできしたものであり、相互間に団結力のあるグループである。このため、一人で利益をあげるという会社の設立は、この地域では不可能であり、個人の利益は、協同組合の利益であり、社会の利益になるのである。

FAGOR

Ulgor Koop E
Hozkailu Tegia
Planta de frigorificos

地域性の強い工業生産協同組合が、自然発生的にできしたものであり、相互間に団結力のあるグループである。このため、一人で利益をあげるという会社の設立は、この地域では不可能であり、個人の利益は、協同組合の利益であり、社会の利益になるのである。

ファゴールにおけるその団結力は、材料的なつながりだけではなく、労働者の需要供給も行っている。

例えば、ファゴールにおいて一つの協同組合が赤字になつても、他の協同組合が黒字になれば、一人一人の労働者の賃金に変わりはなく、同様に一つの協同組合で失業が起つても、同業種の他の協同組合で引き受けことができるのである。

・ エロスキード

エロスキードの売り上げの一〇〇%は、この情報誌などのインフォメーションに使われており、消費者育成の教育も同時に実行している。

エロスキード（労働人民金庫）

次に、二次組合の中で代表的なCLPについて、説明をしておきたい。

一九五九年、アリエタ神父は、「あなたた

ちには、未来がない。今までの形態を破つて、もっと大きなお金が動くようにしなければいけない」と言つた。つまり、資本がないために発展に限りがあり、そのためには、労働者が所有する信用金庫が必要であると助言した。

そしてそこには、助言を与える機関と投資を与える機関が必要であるとし、こうして、CLPが設立されるのである。

この時、アリエタ神父は、「協同組合は通

将来の見通しを考え、再構成を行い、ここに、エロスキードが誕生するのである。

エロスキードの特長は、消費者と労働者の両方が組合員として参加し、同等の権利を持つことと、エロスキードのスーパーでは、誰でも同額の値段で買い物をすることができる

モンドラゴンの街



常、設立時の規模も限られたものであるから、将来は集中力を持つことを規約のうえでは考えなくてはいけないが、在来の古い構造としてではなく、各自の活動を発展に結び付ける労働の共同体としてでなければならない。」といつてることに注目しておきたい。

モンドラゴン協同組合が必要に迫られて作ったCLPではあるが、現在は、CLPが協同組合を指導している。

CLPには、様々な統計が集められ、インフォメーションが豊富にあり、早く伝えることができるので、投資機関にしても、助言機関にしてもしっかりといるといつて良い。

CLPの特長は、やはり助言機関の充実であろう。協同組合からの要請があれば、危険な状態の協同組合にはいりこみ、内部調査・市場調査を行い立てなおしていく。CLPは、このように病気になつた協同組合に対し、投資をしたり、人の派遣をしたり、技術を提供したりと言つた様々な方法で治療をし、最終

的には解散したほうがよいと判断することもある。

これは、保障がしっかりとされているので、失業の心配がなく、失業者を他の協同組合で雇うことが簡単にできるため、協同組合を解散させるという者が容易に出てくるのである。

CLPの協同組合経営に関するサービス部門は、この助言指導課のほかに、調査課、農業食料課、工業振興課、再建整備課、監査情報課、都市計画・建築課がある。

従つて、CLPは、金融機関の機能の他に、モン德拉ゴン協同組合全体のシンクタンクであり情報中枢の役割を果たしている。

・ モンドラゴン協同組合の特長

この他、モン德拉ゴン協同組合の特長としては、給料の格差の少なさがあげられる。

若干の例外を除いては、一番多い人でも、一番少ない人の三倍を越えてもらうことはまずないということだ。

また、もう一つの特長としては、利益の一〇%は、教育費などという形で社会に還元されるということであり、残りの九〇%についても、それぞれの協同組合で若干の率の違いはあるが、リターン分とリザーブ分とに分けられるものの、結局は資本に回るようになっている。

リザーブ分は、赤字の時の補填資金であつ

たり、退職金のような形で回るお金である。

・ モンドラゴン協同組合とは

以上見てきたように、モン德拉ゴン協同組合では、工業・農業・消費・サービス・住宅の異なる部門が、原料・中間製品・最終消費財・サービスにわたる相互の需要供給面で、内部的に強く結びついているのである。

これは、産業の波及効果に関して内部吸収力が強い構造になっていることを示しており、結合の強さは物財の流れだけではなく、異なる協同組合の組合員が相互に支え合う構造になつてゐる。

結局、一つ一つの協同組合は小さく独立しているが、全体としては束になつて、蜂の巣状の結合構造を取つてゐるのである。



いっしょに研修を受けた人たちです。

また、モンドラゴン協同組合の構造は、地域社会の計画によく配慮されているといつてよい。

つまり、地域により過疎・過密のアンバランスな発展がないように、調和のとれた産業構造を永続させる観点から、協同組合の種類を考慮した配置が進められている。このことが、モンドラゴンが「協同組合地域社会づくり」と呼ばれている所以であろう。

そこで生まれた地区グループは、異部門協同組合の複合体であって、人事の交流を行い、計画生産のために数量調整を行っており、ファゴールでも見られたように、各単協の間で利益と損失をならすよう振り替えを行っている。

すなわちモンドラゴン協同組合は、労働の協同体の思想によって統一され、自己雇用型の労働者生産協同組合を基礎としているといつてよい。

以上が、モンドラゴン協同組合の輪郭である。次回は、協同組合の助言者であったアリエタ神父の思想に迫ってみたい。

＝インフォメーション＝

水の都フォーラム'89開催

豊かで活力ある西条市づくりをめざして、勉強会などに取り組んでおられる「西条市生活文化若者塾」の松本勝之さん（西条市役所企画部勤務）から、「水の都フォーラム'89」を来年二月に開催するとの便りをいただきました。

このフォーラムは、別記の講師の方々による講演や事例紹介を中心、「水」という観点から地域づくりを考えていこうとするものです。

できるだけ多くの方々にご参加いただき、お互いに意見交換しながら、一緒に考えていきたいと思います。

皆様の参加をお待ちしております。

※詳しくは、西条市役所企画部企画調整課・松本勝之さんまで。

TEL

○八九七五一一五一五

（内線・二七五）

水の都フォーラム'89

- ◇テーマ “水にふれ、水と親しみ、水と語ろう”
- ◇目的 西条市の母なる川「加茂川」や名水百選選定の「うちぬき」に代表される『水の都・西条』は、建設省のアクアトピア事業やふるさとの川モデル河川、都市景観形成モデル都市等の指定を受けて、『水と緑を活かしたまちづくり』が積極的に進められています。
近年、「ウォーターフロント」「親水」といった言葉が聞かれるようになり、快適な環境づくりを目指して特に「水辺」が見直されているこの時期に、『水の都』を自負する西条の望ましい姿を「水」「水辺」という観点から一緒に考える『水の都フォーラム'89』を開催します。
- ◇とき 昭和64年2月5日（日）10時00分～16時00分
- ◇ところ 西条市総合市民センター
- ◇主催 西条市生活文化若者塾

◇日程・内容等

- | | |
|-------|--|
| 9：30 | 受け付け |
| 10：00 | 開会 主催者挨拶 |
| 10：30 | 基調講演 石川幹子氏／技術士・株東京ランドスケープ研究所プロデューサールーム主幹 |
| 12：00 | 昼食 |
| 13：00 | 事例紹介
広松 伝氏／柳川市環境水路課課長補佐
「住民参加による掘削再生について」 |
| | 石岡 升氏／（財）江戸川区環境促進事業団事務局次長
「東京都江戸川区親水公園について」 |
| | 宮下憲三氏／西条市生活環境部長（予定）
「アクアトピア・アメニティタウン・うちぬき等について」 |
| 14：40 | 休憩（質問用紙回収） |
| 15：00 | 講師と会場とのディスカッション |
| 16：00 | 閉会 |

愛媛二ユーモチづくりテレビ会議

キーワードは「遊」

— これらの地域づくり —

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

山本幹男

去る十月十三日、愛媛と東京を結んで、新しいまちづくりの方向

を深ろうと、キーワードは「遊」— これからの地域づくり —と題し、テレビ会議を行った。

東京側の出席者は、全国の地域づくりをリードしている地域総合研究所(CSK)の

森戸哲所長

植松勇研究員

福田敬研究員

一方、愛媛側は、県内で熱心に地域づくりを取り組まれている

守谷和久さん(川之江市)

鎌田宏史さん(城辺町)

白石高啓さん(新居浜市)

の各氏にお願いした。

— 森戸所長のお話 —

最初に所長は、範囲の広い地域づくりの中で、今日は「遊」というテーマに絞って話すと前置きされ話された。その話の内容は、概ね次のようなことだったと思う。

『近年、むらおこしかとか、一村一品とかが盛んになったが、これは

情報技術の進歩に負うところが大きい。しかし、情報化は一村一品ではなく、百村同品を全国にもたらした。一方、この時期、ノウハウ機関等の東京一極集中が進み、

ト開発も、水辺を遊空間にしよう

ということで、東京国と地方国などと呼

びだした。そこで九州の知事さん

方は、地方試練の時代とか、地方

反乱の時代などと言っている。反

乱はできないので、地方は、何で生き延びようかと考えだした。そ

れが、コンベンションとかリゾートとかであり、いわゆる人集め産業で生き延びようとしている。

そこで何が重要かと言えば、

「遊」というコンセプトがでてくる。あるデパートでは「生活遊園地」とか「衣・食・住・遊」とか言っているし、ウォーターフロント

— 意見交換 —



続いて、愛媛側との意見交換を行った。

まず、白石さんは、建築家としての経験から、「遊核」的要素の中に、「かいわい性」はあるのか。香港に九龍城砦という非常に濃密な究極のスラムがあるが、これをみたとき心が落ち着く。「都市とは、人がいて都市があり、人と都市との関係は、もっとどろどろしていくいいのではないか。」もう少し「遊核」をわかりやすく説明してほしい、と述べた。

森戸所長は、「遊核」とは、そ

があり、その典型がコンベンシヨ

ンであり、リゾートや観光地であつたりする。東京は既に「遊核」都市であるが、「遊核」は全国どこにでも必要であるが、イコール観光地ではない。リゾートなど丸ごと「遊核」的なものをという話だが、本当はそれ以外の機能、生活の秩序などが守れるようしなくみを大事にした開発が重要だ。』と、地域独自の「遊核」づくりを力説した。

れぞれの都市や地域が独自の「遊核」を創つていいのだとし、公園を例にとり、日本の公園は「遊核」ではない。規則ばかり多くて遊ばせない。人がもつと「かいわい性」持つて楽しめるようにすべきで、そういうものが「遊核」となると強調した。

次に、鎌田さんは、今まで自分がやつてきたジャズ祭りや朝市などのイベント等を踏まえ、地域づくりは「よそとは、うちは違う」ところから出発しないといけない。自分は、興味の趣くままにやってきて評価され、それが地域づくりだと言われているし、そんなに地域に拘らなくともいいんじゃないか、と述べた。

これに対し所長は、地域づくりの先進地といわれる湯布院を例にし、ここの人たちも、表向きは地域のためという話をしているが、本音は自分のやりたいことをやっている。そして、たまたまうまくいったということで、鎌田さんのいわれるとおりだと答えた。

守谷さんは、「遊ぶ」ことは、

日本人の苦手な部門であり、昔か

ら「飲む、打つ、買う」が遊びの代名詞で、良いイメージがない。

働くことが良いことで、遊ぶことは悪いことという概念から抜けきれない。しかし、自由時間が増えつつある現在、「遊びの機能のない車は、事故を起こす。」

と言われるよう、これから時代の価値観は、「遊び」が大きなウェイトをしめると、「遊び」の必要性を述べた。

最後に所長は、「遊核」のまとめとして、

オフィスライフ（職場）
ホームライフ（家庭）
コミュニティライフ（地域社会）
ストリートライフ（街）

の領域を取り上げ、「遊核」とは何処かというと、ストリートライフに入る。これからは、この領域

—おわりに—

ジャズコンサート等を自分が趣向する白石さん、「かいわい性」を絶えず意識し、自らもその空間に身を置きたいという考えを、熱っぽく語っていたのだ。

会の司会進行をお願いし、限られた時間の中で、会議をまとめながら、まちづくりの思いを話された守谷さん。

それぞれの個性を尊重しながら的確にアドバイスいただいた森戸所長さん、植松さん、福田さん、個性と個性のぶつかりあいが、一つのドラマとなつて、「遊核」づくりのイメージが煮詰まっていった。

この会議は、守谷さんがいわれたように、今日のテーマ「遊」をこれから地域づくりの一つのヒントとしてもらい、参加者それぞれが、個人として理解した感性と思いを行動として県内に対し地域

づくりの輪を広げていくことを、期待したいと思う。

最後に、出席者をはじめ、ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。ここから力がとうございました。こころから感謝申し上げます。





マルセイユでサバイバルゲーム!?



'86年7月21日、1週間いたローマを出発し、1ヶ月の旅に出た。

テルミニ駅で、見送りのみんなに1ヶ月後の再会を約束して、最初の目的地フィレンツェへ。そしてピサ、ジェノバ、モナコを経て、友達の待つマルセイユへ。

マルセイユで迎えてくれたアニエンスの車はワーゲンのオープンカー。ご両親はお医者さま、そしてマルセイユ市内の家は大邸宅。庭には5、6件家が建ちそう。

「ねえアニエンス、私たちここに泊まるの?」

「ううん、ここは両親の家だから夏に使う海の家に行くの。」

「わあ、すごい! 楽しみ。」

わくわくしながらアニエンスの車で約1時間、真っ白な山(雪ではありません。)を越えると、真っ青な海と数々の別荘……。

「アニエンス、どれがあなたの?」

指さす家をみてびっくり、こんなとこに泊まれるのかしら?と思いつながら案内してもらう。アニエンスの部屋は、自分でペンキを塗り、中二階をつくりベットルームにしてる。(まだ完成はしていないけど)「トイレはここ、シャワーはここ。」「はーい。」

とりあえず、すぐ夜のパーティの準備にとりかかることになった。パーティにはアニエンスの友達たち、約30人が集まってくれた。きれいにドレスアップしたモデルのような人、さすがはフランス人ってかんじのハンサムなひと。"こんなことならフランス語、勉強するんだった、ザンネン。"と思いつつ片言の英語でおしゃべり。

「今日暑いね。」のひとつに、「Why don't you take a bath」「えっ、だってどこに。」「目の前さ。」「えー! 海よ。」「そう。」ザバン! ひーこのひと変わってる。

でも、こんなの序の口。トイレ、あるけど水が流れない。外にある井戸から水をくみあげてきて流す。シャワーだってあるけど水はでない。(あるというだけ!)食器洗うのだって、ふたつのバケツに水をいれ、ひとつに洗剤をいれて、そこに食器をつけて洗い、もうひとつのバケツにつけてすぐ。

これじゃあきれいにならないからコップに口をつけると洗剤の味が。

私にとっては、すごいサバイバルゲーム。最初、変つてると思ったけど、結局Bath!は海。毎日せっせと泳ぐ。中学の時の中島でのキャンプだって水道もシャワーも使えた、なんて昔のことを思い出したりして。でもすっかり慣れてしまえば、毎日楽しい。マルセイユの人たちは、普段素敵な家に住み、快適な暮らししてて、週末は自分の力だけで過ごす。そしてそういう不自由さ、不便さを楽しんでる。"何でも楽しみしてしまうなんて、とってもすてき。"なんておもいながらアニエンスに別れを告げ、次の目的地バルセロナへ。

パーティ準備の前に パチリ!



楽しいひとときありがとう。 Au revoir!



Masumi Tange

お屋時と、それぞれの最も都合のメセージに付加された日付と時刻を見ると、深夜、早朝、学生、独身女性、オジさんと実にさまざまな人が、それぞれの立場で意見を述べている。しかも、それとのメセージに付加されたお屋時と、それぞれの最も都合の

大分にあるパソコン通信ネットCOARAに、六十一年八月、「子育て」コーナーができた。子育てについて話し合いましょうとの呼びかけに様々なメッセージが寄せられた。「子供の目は、いつ頃から見え始めるのか」、「子供をしかるべきかどうか」をめぐって議論も沸いた。学校教育と国旗といった問題も熱心に討議された。こうして、このコーナーに寄せられたメッセージは一年余りで三六〇以上にもなった。コ

ンピュータの体験を共有できる”

パソコン通信で

パソコン通信ネットワーク

拡げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 4



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

情報化社会の到来と言われて久しいが、情報を一方的に伝える手段ばかりが講じられ、ややもすると“情報過社会化”にもなりかねない。しかし、私たちが本当に欲しているのは、情報を受け取るだけではなく、自らが情報を発信することであり、実際の体験に基づいた情報、自分の意見、経験、知識といったものを多くの人と共

よい時間に自由にアクセスし、コミュニケーションに参加している。パソコン通信を利用すると、時間、空間を超えて、それぞれの社会的な立場にとらわれることなく自分の考えを多くの人と共有できる。そうすることで思いもかけない意見、考え方に対するものしばしば、何とも言えない知的興奮を感じることができる。しかも、ここで語られていること、共有されている情報は、それぞれの人が自分で経験してきた体験情報だ。

有することではないだろうか。これまで体験したことのなかつた発信することの喜び、自分の意見にダイレクトに反応が返ってくる喜び、思いもかけない意見とのめぐりあい、その時の知的興奮、パソコン通信にはこうした刺激がいっぱい詰まっている。

見にダイレクトに反応が返ってくる喜び、思いもかけない意見とのめぐりあい、その時の知的興奮、パソコン通信にはこうした刺激がいっぱい詰まっている。

まず、パソコン通信でもよく使われている一般の電話回線の場合、料金は十二段階の距離による格差料金になっています。このため、近距離ではNTTの通信サービスに頼って、NTTのサービス料金を比較することで把握できます。

まず、データでみる愛媛情報化の現状（一）＊＊＊遠近格差の大きい通信料金＊＊＊

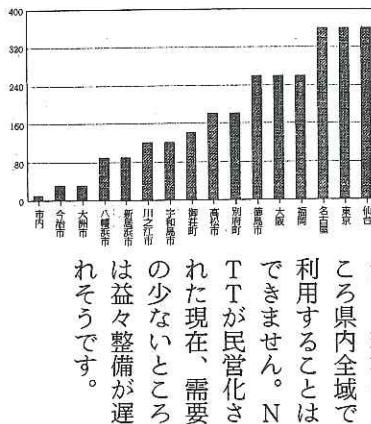
四国の情報通信手段は、主としてNTTの通信サービスに頼っています。そのため、情報通信にかかるコストは、NTTのサービス料金を比較することで把握できます。

NTTによる通信サービスの提供状況
(愛媛県内) 62.12.31現在

サービス名	提供地域
ファクシミリ通信サービス	松山市 北条市 伊予市 松前町 大洲市 八幡浜市 伊方町 宇和島市 今治市 大西町 菊間町 東予市 新居浜市 西条市 川之江市 伊予三島市
回線交換サービス	松山市 今治市 八幡浜市 川之江市 伊予三島市
第1種パケット交換サービス	松山市 大洲市 八幡浜市 宇和島市 今治市 東予市 新居浜市 西条市 川之江市 北条市 伊予市 伊予三島市
第2種パケット交換サービス	松山市 北条市 伊予市 松前町 大洲市 八幡浜市 伊方町 宇和島市 今治市 大西町 菊間町 東予市 新居浜市 西条市 川之江市 伊予三島市
ビデオテッククス通信網サービス	松山市 北条市 伊予市 松前町 今治市 新居浜市 宇和島市 八幡浜市 伊方町 菊間町 大西町 西条市 大洲市 川之江市 伊予三島市 東予市 丹原町
テレビ会議サービス	松山市

松山市から各都市までの通話料金

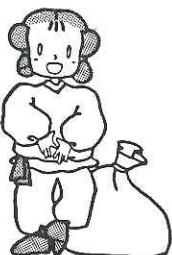
5分間の通話料金



次に遠近格差の縮小を図ったNTTの新しい回線サービスとして最近急速に利用者が増えているのに、ファクシミリ通信網サービスとパケット交換サービスがあります。県内でも十四倍の格差が生じています。

から、現在のところ県内全域で利用することはできません。NTTが民営化された現在、需要の少ないところは益々整備が遅れそうです。

村おこし実践大学とは!!



いいからやつて見ろ!』と

青年部にハッパを掛ける田

房会長を見て『声を出さない』の自説とがパッと
ドッキングしてしまったのです。

えひめ地域づくり研究会議会員

出雲神吉

名曲あり、時には迷曲もありま
すが「人間誰しも知っている歌し
か歌えない」と思いつつ「えひめ
地域づくり」の歌を知つて歌いた
い!の思いは強烈です。

▼声を出さなきや歌えない

前に、人間誰しも「知つている歌
しか歌えない」の自説を若さのい
たりで、生意氣にも熱心に話すこ
ととなつたのです。
生まれて初めて来た「中島町」
ですが、素晴らしい印象を私に与
えてくれました。田房会長より
『思い入れ』を教わつたのです。

▼思う念力岩をも通す
中島町商工会青年部
昭和五十九年十二月二十一日、
私に会いに、中島町商工会青年部
の方が来られました。経営指導員
の松本彰二さん達です。

先週の金曜日に初めて中島に行
き、田房会長にお会いして、一週
間後に、青年部の方が実動するの
は「村おこし・思う念力岩をも通
す」の気迫を感じたのです。

四国も、もちろん愛媛県に来て
まだ半月も経たない私には、とま
どいが生じた程です。

中島町の実態を一つ一つ説明さ
れ、「過疎化の問題」を新ためて
知る事となりました。そして、勉
強会をしたいので講師をやって欲
しいとの依頼がありました。身に
余る光栄ですが、考えさせて頂く
ことにしたのです。

「思う念力岩をも通す」気迫あ
ふれる松本彰二さん達、郷土愛あ
ふれる青年部の方達に勝る「思い
入れ」があつて、お付き合いが出来
るからです。



▲記念講演

「知つてている歌しか歌えない」
歌は世につれ世は歌につれ…と
申します。歌と世の関りを分かり
やすく説明されていると、何時も
感心している言葉の一つです。

「カラオケ」も持ち歌を増やす
には、それなりの時間が必要であ
り、もちろん台本も必要です。
台本を見て、時間をかけての努
力が実つて「歌を知ることが出来
て歌える」のです。

えひめ地域づくり研究会議の皆
さんの歌を『舞たうん』でお聞き
したり、新聞・TVでお聞きして
私なりに歌の勉強をさせて頂き、
感激も一人です。

過疎化問題の解決策の第一歩は
「やらずしてはやれん、何んでも

▼新業態開発が私の仕事

中島町だけならやつても

私の仕事は新業態開発！その中で「町づくり」は、人の息遣いで感じとれる。そう思ったので松本さんと、前向きに取り組むことにして準備だけ始めたのです。

時代は昭和二十年の「物不足時代」から、今日の「物余り時代」へと変り、業種時代から業態時代に変つてしまっているのです。

中島町を見た時「物不足時代を今も生き」もちろん、「業種時代」を感じました。本来なら今は大変なる中島町だが、偉大なる「みかん」の力で今日がある中島町なのです。

新業態開発をしようとして、誰がする、どうする。と考えたとき事の大きさに心痛するばかりです。心痛する自分の力不足に日々泣きました。喜怒哀楽を身にしみて感じて、六十年三月末に「中島町の村おこしストーリー完成」です。中島町を愛する思い入れ！もう中島町民にも負けません。



▲「頑張って！」
第3回中島トライアスロン大会

▼昭和六十年四月二十一日 村おこし実践大学開校

昭和六十年四月、中島町商工会青年部による「村おこし実践大学」が開校して、三年と九ヶ月を迎えたのです。

村おこし実践大学は全国どこに出来ても、中島町の誇りで、近い将来には、愛媛県の誇りになるでしょう。誰でも自由に参加しての窓口は広く・実践は大きく、偉大なる事も提言し、実行もする。四国で初めてのトライアスロン大会

も三回目を迎えました。
「名実一体」の皆んなの広場なのです。

松尾宏中島町長が多忙の時間をさいて出席され皆さんと「村おこし実践」されることもしばしばあります。町長の行動力はすごい！これは天分です。

町の大崎企画課長は積極的に参加され、新鮮でニュー中島の提言をどんどんされ熱心さとアイデアに皆んな感心しています。

伊予銀行の田中支店長もハイレベルの提言をされています。やはり、皆んなの広場だ。

「みんなで歌おうヨ！」で決めて、歌い出したら、町も商工会も歌い出したのです。

中島町の皆さんありがとうございます。本当に感謝される言葉が選手から聞かれます。歌も上手になった。中島町はサンキュー・マイカン

トリ・アイランドです。

サンキュー（有り難う）、マイカントリー（我が郷土よ）が心で

お父さん、お母さん、有り難う。我が郷土よ、有り難う。の感謝活動が「村おこし実践大学」です。

今後増え、楽しい歌声とともに“な・か・ま”が増えるでしょう。

▼村おこし実践大学・心はサンキュー・マイカントリー

人間誰しも「知っている歌しか歌えない」今では当たり前の会話です。

全国の曲を耳にした時「トライアスロンに出たい」の曲が「村おこし実践大学」に入つて来たので

す。

東山祐輔青年部長が、



▲商工会からの「感謝状」手に
中島町の皆さんと

—お・知・ら・せ—

えひめ地域づくり研究会議 一九八九年次総会が開かれました

られました。

整然たる人工林の深緑の中につけて、紅葉が鮮やかに映える様子が、季節を感じさせる同時に、地域でうごめく『人』の姿をも連想させるようでした。

晩秋の冷気が感じられる高原の町上浮穴郡久万町において、十一月十二日（土）・午前十一時から『えひめ地域づくり研究会議一九八九年次総会』が開催されました。

◇…◇…◇

総会行事の全体像としては、十二日午後から翌十三日にかけての『全国「木」のフォーラム』を、久万町・財愛媛の森林基金・久万町森林組合と当会議の共催事業とし、総会シンポジウムを兼ねての日程で開かれたのです。

総会では、渡部鬼子雄・代表運営委員の開会挨拶、来賓の今井康容・県調整振興部長と河野修・久万町長からご挨拶の後、白石高啓さんと鎌田宏史さんを議長に、会が進め

◇…◇…◇

運営委員を代表して、岡田文淑・代表運営委員が「この会そのものはボランティア集団であり、より人間らしい魅力と活力に溢れる地域づくりを目指される会員それぞれが個々の地域で実践する諸活動を、側面からバックアップしていく」と等、この会の方向性について述べられ、守谷和久・代表運営委員の閉会挨拶で協議を終えました。

◇…◇…◇

会員の皆さんの地域を愛する熱き情熱のぶ

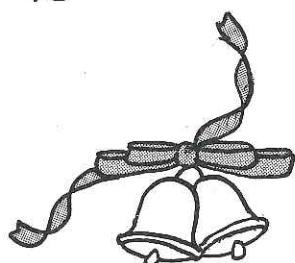


続いて、運営委員の選任。今回は「運営委員推薦委員会」がつくられ、その協議の中から、地域・官民等に配慮して、できる限り各会員の声が反映され、動きやすい形で推薦をしていただき、別記の皆さんにお願いすることとなりました。

まず、過去一年間の事業・決算報告、今後の事業計画・収支予算について確認がなされました。

△なお、総会の資料等につきましては、各会員の皆様に別途お送りさせていただく予定です。△

また、ニュース・レター（舞たうん）や、フットワークでもってネットワークを大切にしていきたいと考えておりますので、皆様からもどんどん発信して戴きますようお願いいたします。



えひめ地域づくり研究会議

* * 運営委員は次の方々です。 *

【代表運営委員】

渡部 鬼子雄（久万町）

○八九二一二一一一

岡田 文淑（内子町）

○八九三一四四一二一一一

守谷 和久（川之江市）

○八九六一五八一四五三五

豊田 真喜男（川之江市）

○八九六一五八一三一七〇

白石 高啓（新居浜市）

○八九七一三三一三〇二八

越智 省二（新居浜市）

○八九七一三三一五一五一

原 博彦（岩城村）

○八九七一七五一二五〇〇

村上 寛仁（生名村）

○八九七一七六一三〇〇〇

島津 豊幸（松山市）

○八九九一三一一八九八〇

高須賀忠篤（松山市）

○八九九一四八一五六二〇

宮本 俊一（松山市）

○八九九一二五一五五五七

玉水 寿清（久万町）

○八九二一二一一一

宇都宮栄一（久万町）

○八九二一二一一一

亀岡 徹（五十崎町）

○八九三一四四一二二〇一

井上 善一（瀬戸町）

○八九四一五二一〇一一一

藤本 一三（野村町）

○八九四一七二一一一

鎌田 宏史（城辺町）

○八九五一七二一〇五七一

岡本 和夫（城辺町）

○八九五一七三一〇四六〇

若松 進一（双海町）

○八九九一八六一一一

近藤 誠（事務局）

○八九九一二五一五五五七

井上 謙二（事務局）

○八九九一二五一五五五七

伊予三島市

○八九九一二五一五五五七

伊予市

○八九九一二五一五五五七

宇摩郡

○八九九一二五一五五五七

周桑郡

○八九九一二五一五五五七

温泉郡

○八九九一二五一五五五七

上浮穴郡

○八九九一二五一五五五七

伊予郡

○八九九一二五一五五五七

喜多郡

○八九九一二五一五五五七

東宇和郡

○八九九一二五一五五五七

南宇和郡

○八九九一二五一五五五七

西宇和郡

○八九九一二五一五五五七

北宇和郡

○八九九一二五一五五五七

合計



えひめ地域づくり研究会議会員状況

63年11月1日現在

事務局	区分	市 松 山 市	郡 今 治 市	市 宇 和 市	市 八 幡 市	市 新 居 浜 市	市 大 洲 市	市 川 之 江 市	市 伊 予 三 島 市	市 伊 予 市	市 北 条 市	市 東 予 市	市 宇 摩 郡	市 周 桑 郡	市 越 智 郡	市 温 泉 郡	市 上 浮 穴 郡	市 伊 予 郡	合 計						
790 松山市道後一万一一二	自治体職員	23	5	1		5	2	1	2	1	1	2	6	23	7	11	5	32	11	17	9	7	171		
愛媛県まちづくり総合センター内	商工団体	1				1					1			3	1	3	1	2		1	1	3	18		
791 松山市	農林団体	3		1				1						1	1	1	1			1	1	10	10		
792 松山市	その他市民	21	3	1	1	6		1	19	2	1	1	9	2	2	4	1	1	4	1	1	3	1	85	
793 松山市	合計	48	8	3	1	11	3	2	20	4	2	1	11	4	9	31	9	15	7	39	12	19	14	11	284

えひめ地域づくり研究会議

□□ニュース・レター速報□□

『全国「木」のフォーラム』 開催される!

一発信する林業地・久万町ー

十一月十二日・十三日の二日間、全国規模での『木のフォーラム』が新築されて間もない上浮穴産業文化会館(上浮穴郡久万町)で開催されました。

これは、木造建築の再興を願う久万町とえひめ地域づくり研究会議を中心に、今年八月にプレイベント「ミニ・木のフォーラム」を持ち、準備を進めていたものです。当日は、地元林業者・建築関係者・自治体関係者など約三〇〇人が一堂に集いました。

◆十一月十二日(土)

開会行事の後、河野 修・久万町長から久万町の木造建築の現況と問題点を中心に基調報告がありました。

次いで、カナダ・ブリティッシュコロンビア州林産業審議会アジア地区総代表のジョン・M・パウルス氏から、ツーバイフォー工法によるカナダの木造建築の技法等について、事例報告が行われました。

記念講演では、文化庁・主任文化財調査官で千葉工大講師の半澤重信氏が、日本の伝統的木造建築の技法について触れながら、専門的視野から、木を知り木を生かせる使い方等

について述べられました。

このあと、参加者の交流会がもたれ、相互の情報の交換が行われました。

◆十一月十三日(日)

まず、日本女子大学家政学部住居学科教授の小川信子氏から暮らしの中からの木へのかかわり方等について基調講演がありました。

パネルディスカッションでは、猪瀬 理・愛媛大学名誉教授をコーディネーターに迎えて、細田治隆・㈱日本総合建築事務所常務と木島安史・熊本大学工学部教授からの問題提起を中心には、小川、半澤両氏も加えて討議されました。

最後に、町立美術館と町立畠野川小学校を訪れ、関係者からの説明を受けました。

※ 二日間にわたる『木のフォーラム』の詳細につきましては次号(VOL9)で紹介の予定です。

まちづくり活動の情報誌として、この「舞・たうん」を隔月で発行しております。皆様からのレター通信誌として活用下されば幸いです。

次回「舞・たうん」特集は
"交 流"です。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどしどしお寄せ下さい。

お待ちしています。

「舞・たうん」編集係

二人のGAL(丹下・久保田)まで。

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

〒七九〇 松山市道後一萬一の二

TEL〇八九九(二五)五五五七
FAX〇八九九(二五)六六八〇

